

度の差違は存するも心理學に於ける 研究法と他の自然科学に於けるものと性質を異にするものと考ふことは出来ぬではなからうか。所謂行動主義に關しての著者の見解は能く其謬點を指摘して居る。行動は唯研究の手段に過ぎずして研究の對象にあらず若し研究の對象を以て行動なりとせば是は行動學(此の如き學が成立し得とせば)にして心理學と稱することを得ぬ。但し行動主義の所論は不當であつても其研究の結果は心理學の材料として充分の價值を有し得ること亦著者の言の如くであらう。著者はなほ補助的研究法としての統計法のこと論及して居るがこは恐らく狹義の統計法を意味し主として發問法の如きものを指して居るのだらうと思はれる。之に對しては吾人も亦習練ある専門家が周到なる用意を以てせば適當の價值を齎らずであらうと思はれるが寧ろ其弊を醸す場合が少くないから學者は大なる警戒を要すること吾人の常に注意する如くである。若し夫れ構成主義か機能主義かの問題に關しては吾人は此の如き區別を立するの煩を厭ふものである。凡そ研究の結果を組織するに當りては分析綜合の何れか一方のみによりてせんとするものあらば無謀も甚しきものであるといはなければならぬ。意識現象が統一的であるといふことはそれが分解を許さぬことを意味するものではない。又其孰れかに重きを置く點より此兩主義を分つとすれば多少の意味あるやうであるが科學たる以上は分析に重きを置かなければならぬこと勿論であつて幾分應用的傾向を帶ぶるに當りて綜合を主とするは亦當然の勢であると云はなければならぬ。心理學に於ても心理學其者よりも之を基礎として成る他の精神科學に於て此傾向の著しきも亦之

がためである。之に關しては著者は第二篇の始に於て抽象的構成要素の意味でふ題下に最も明瞭に述べて居る。

以上は主として心理學全體に關する議論であるが部分的諸種の問題に關しては茲に論述するの餘裕を有しない。今は唯氣附きし疑點の二三を列擧するに止めやうと思ふ。第一有機感覺の要素の不明なることは分析的研究の未だ不充分なることに歸して居るがこれは寧ろ非分化でふことに有機感覺の特色があり分析的研究の將來可能なりや否やは疑問ではなからうか。此の如きは所謂生物學的の研究本能の研究に没頭する人の最も注意すべき點ではなからうか。次に感情の方向に關しては多様でふことと根本方向とは峻別すべきことであり感情が多様であるといふことは其根本方向の一たることを妨ぐるものではないではなからうか。更に又忘却の説明に際し記憶は過去を美化する過去の不快なことは忘却せられ快なことのみが記憶せられると稱してふことを記して居るが忘却するは不快な出来事にあらず再生に際し感情が快化するによるのであつて不快な出来事は寧ろ忘却しがたいと見るべきではなからうか。

終りに臨んで吾人は此の如き眞摯なる心理學書の我學界に現はれたるを讀者と共に衷心より喜び著者の勞に對し謝意を表せんとする者である。東京神田南神保町十六、岩波書店發行、定價壹圓二十錢。(千葉胤成)

### 原始基督教

石原謙共譯  
山谷省吾

原著はライプチヒの老教授ゲオルグ・ハインリチの "Das Urchristentum"

istening"である。原著者は新約研究の大家として、それを中心として、基督の發生を説明するに最も適任者であり、且つ常に其周囲の文化特に當代の希臘羅馬の思想との關係を考慮する所にその特長がある。全編は簡單な序論の後に四章を分つて、順次に基督の事業、エルサレム教會の成立、パウロの活動及び使徒後時代を説明して居る。先づ序論に於ては外部的史料を欠如して居る原始基督教の研究は、唯一の新約書を中心として、それから歴史的事實を推究するより外ないといふ著者の立場が宣言されて居る。而して第一章は福音書に現はれた所謂歴史の基督の考究であるが、其れを嚴密な歴史的批判から云へばとにかく、大體上その見解は公平と云はねばならぬ。基督の神觀、天國、罪惡觀、奇蹟等の説明は最も要を得て居る。唯だ屢々新約傳説に忠實すぎる傾向が見えるのは、所謂歴史主義の人に有りがちの難であるが、然し信仰の眼から見た基督の人格を明瞭に現はすには亦止むを得ないことであらう。第二章に於てエルサレム教會の起源を基督復活の信仰に歸するのはいゝとして、其信仰發生の額末や弟子達がエルサレムに集つた過程の曖昧に付せられて居るのは、材料の不備とは云へ物足りない心地がする。猶太人教徒と異邦人教徒との律法に關する思想の懸隔及び相互の交渉は、後の各章と照應して最も適切に描かれて居る。第三章のパウロを中心とする基督教の傳播、特に其背景としての希臘羅馬世界に於ける哲學道德及び宗教の一般的狀況は、著者獨特の識見を以て興味多く述べてある。パウロの傳道方法、書翰の體裁及び其思想信仰の纏つた敘述も巧妙を極めて居る。終りに第四章に於てエルサレム教會の後期及び分散の

狀況は歴史として今少しく精細な考慮と敘述が望ましい。其ヨハネ文學の內面的考察から使徒のヨハネと長老ヨハネの活動を區分することも、學的には議論のある所であらうが、然し其本文批評及びそれから出立して教會内外の思想及び組織が第二世紀前後に變遷して行く狀態を説く所は、蓋し著者の最も得意の舞臺であらう。要するに本書は部分的考證に備せず、又信仰主義の誇張や修養本位の訓誡とは趣を異にして、全く歴史的研究の立場から、而も基督教に十分の同情をもつて、簡明に其發展の初期の狀況を叙述せんとするのである。故に其國譯は波多野博士の『基督教の起源』と共に、我國の基督教研究者に好個の指導者となるであらう。殊に巻尾に付した譯者の註は初學者を便すると多く、譯者の勞を多ししなければならぬ。然し忌憚なく云へば全體として譯文は此目的の爲めに適當なものとは云はれない。翻譯の困難を實際に味つた者はそこに充分の同情を持つては居るが、然しいかに原文の態を現はすにしても、其用語も文脈も殆んど原文を讀むつもりで見なければ理解し難いやうなのは遺憾である。ことに本書の如き一般の讀を目的とするものに於て、今少し國語らしく自由に譯されたらばと思はれる。定價壹圓、東京神田區南神保町一六、岩波書店發行。(宇野圓空)

## 寄贈雜誌

哲學雜誌、思潮、丁酉倫理講演集、心理研究、六合雜誌、東洋哲學、東亞之光、早稻田文學、學校教育、教育、内外教育評論、普